灯

「誰のための連合か」。日本経済新聞の記事が目にとまった。実兄が連合の役員を長く務めたので関心がある。脱時間給制度（高度プロフェッショナル制度、年収1075万円以上の一定職種対象者を時間外規制から除外）に対し、当初の賛成から反対へ生き残と連合は最後に方針変更したが、その量の方向転換が「誰度のため」、つまり働く側のためにならないとの批判だった。

草野　義輔

経済紙の立場から、時代の変遷とともに働き方も大きく変わってきているのだから「脱時間給制度」という新しい動きには賛成して当然で、なぜ土壇場で反対したのかーという主張だ。

確かにICT（情報通信技術）などの発達や職種の多様化で昔にはなかった多様な働き方が可能になっている。連合執行部は現状を踏まえて、過剰労働抑制など条件付きで賛成したのだが、おそらくは組織内の時間外手当を絶対にという従来の考え方に固執する、いわば守旧派的勢力の反対に遭い、土壇場での賛成方針撤回となったようだ。

兄からは生前、連合内の左右さまざまな考え方の違いをどうまとめていくか、の苦労話を何度も聞いた。今回の問題からも連合がまとまりにくい体質を引きずったままなのだろうとの印象を持つ。

どんな組織も新しい時代の流れをつかみ、それを柔軟に取り入れていく度量がないと生き残れない。連合の創設から関わった天上の兄はいかに。（昭和学園高校理事長・日田市）